

[研究ノート]

アートの表現/研究/実践と社会との 再接点づくりの試み ーコロナ禍におけるオンライン授業実践からの アートグラフィックな探求ー

笠原 広一(東京学芸大学 教育学部 准教授)

細野 泰久(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科/武蔵野美術大学非常勤講師)

古徳 景子(東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科/チアパス州立芸術科学大学准教授)

抄録

本稿は、2020年度前半期に東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の授業で行なった、研究と社会の接点を考える取り組みの報告である。大学院生と教員が自身のアートの表現/研究/対人支援の実践を省察し、模索を通じてどのような社会的接点を生み出せるかを試行した。その結果、メンバーの背景にある自身の表現/研究/実践と社会の繋がりが浮き彫りにされ、その延長上の試行錯誤を手掛かりにオンラインワークショップの実施に至った。ワークショップでは、認知やコミュニケーションの基盤となる感覚や場の臨場感に根ざした関わり合いに難しさがあることや、コンテキストの共有、アプリケーションの技術的特性の課題が浮上した。一方で遠方からの参加やオンラインでも自分自身が変わる起点となるような体験が生まれることもわかり、コロナ禍の状況が続くなかで、表現と研究と実践を統合的に捉えた新たな取り組みと社会との接点づくりの模索を継続していく必要があることがわかった。

Key word

コロナ(COVID-19)、オンラインワークショップ、A/r/tography(アートグラフィー)、感覚、臨場感

1.はじめに

1-1. 本研究の背景

本研究は大学院博士課程の授業での取り組みに基づくもので、従来のアカデミックな研究や論文執筆に加え、アートによる表現、研究、対人支援の実践(以下、実践)がどのような形で社会と接点を持つようになるのかを、特にコロナ禍の中でどのように接点を捉え直し、つくり直していったかを報告する。メンバーはワークショップ研究(笠原)、ソーシャル・プラクティス研究(細野)、マリンバデザイン研究・マリンバ奏者(古徳)を専門とし、2020年度前半の授業での取り組みを対象とする。

1-2. アートと研究と実践に携わるa/r/tとしての立ち位置

アートの表現や研究や実践に携わる者にとって、その取り組みの社会的意義は自明ではない。特に教育や福祉などの対人支援と共にあるアートの実践の多くは日々の社会活動を生きる中でうまく表出・表現できないものや、抱え方すらわからない感情や状況、不安や生きづらさに何らかの形を与え、支えを見出そうとする関与や試みである。その研究も事象や出来事に何とか寄り添い、現象と言葉を往還し、一般化しえない固有の物語をなんとか言葉で掬いだそうとする営為である。

各々の美術や音楽での取り組みと社会との接点を再度意識することは、芸術や関連研究の有用性を求める風潮もある中で、当事者自身が絶えずその繋がりをどう意識するのか、それが表現・研究・実践にどう影響し、その意味を変えていくのか、それが自分自身のあり方をどのように変えていくのかということと切り離すことはできない。

こうした立ち位置を生きる私たちはジャン＝リュック・ナンシーが言う「複数にして単数の存在」[Nancy 2005]であり、リタ・アーウィンがアートグラフィー(A/r/tography)においてa/r/t、つまり芸術家(Artist)であり研究者(Researcher)であり教育や対人支援の実践者(Teacher)でもあるという複数のアイデンティティに重なる[Irwin 2019]。その複数性は決して居心地よく共存するわけでもなく、時に深く入り組んだ問題となり、自身のあり方に大きな影響を及ぼす。アートグラフィーは上述のA/r/tとgraphyの造語である。A/r/tの三つ(複数)の関わり方と活動、それについての省察と記述(graphy)を往還しつつ生成(Becoming)していくハイブリッドな表現であり研究であり実践である。アーウィンがティム・インゴルドのライン[Ingold 2007]のイメージに例えたように、様々な活動や探求の営みのラインが絡み合い、ときに解けたりしながら、自己の、自己と他者との、自己と社会とのあいだを(にあるものを)形づくっていくことに、こうした営みはなぞらえることができる。こうした探求それ自体がアートでもありリサーチでもあり実践でもあり、探求者の生と切り離し難い「生きる探求」(Living Inquiry)となっていく。本研究はアートの表現と研究と実践が今日の社会といかなる接点を持ち得るかという問いから始まった、コロナ禍の中の半期間のオンライン授業を通じた生きる探究の一端を示している。

2. 三人の表現/研究/実践の接点について考える

2-1. 大学院の授業について

今回の実践は東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の博士課程の授業「美術教育方法論研究4」での取り組みである。研究に携わる者が自身の研究や実践にまつわる語りや関連理論との絡み合いを捉え直し、社会との新たな接点を生み出す可能性の模索を試みたものである。それは同時に大学院での研究をどう社会的に共有していけるかという試みでもある。まず各々の表現と研究と実践の背景を語りとして共有し、実践の模索とオンラインワークショップを振り返ることで探求の意味を考察する。

2-2. アートを通じた自分と世界への関わり方(笠原)

私(笠原)は絵を描くことが好きだったが大学では社会学を専攻し、途中から美術教育に進んだ。最初の仕事はチルドレンズ・ミュージアムでワークショップや展覧会の企画を行なった。一方で空き店舗のギャラリー化などまちづくりと連携した活動も行い、人と社会のあいだでアートと共に何がで

きるかを模索して20代を過ごした。

その後、芸術大学で幼児教育機関づくりに携わりながら、地域でワークショップを行う人々の支援を行い、アートと人に関わる社会的接点を模索していた。しかし、様々な領域のあいだ(in-between)にいる自分は中途半端で、自分の取り組みを理解し、その意味を言葉で表すこともできなかった。また、活動の体験を参加者と「共に」感じ合う感覚も感じられなくなり、こんな気持ちで続けてよいのか、自己満足ではないかと思悩んだ。その後大学院に入り、ワークショップで参加者が体験していることが一体何なのかを出来事だけでなく情動などの感性的視点で捉える研究を行った[笠原2017]。それは私自身が参加者とワークショップの場に「共にある・居る」感覚を取り戻す生き直しのようなでもあった。

その後は東日本大震災後の郷里福島と少しずつ関わりながら、自分の活動(表現/研究/実践)の意味を故郷と自分とアイデンティティの間の逡巡も含めて模索しながら活動を続けている[笠原 & アーウィン 2019]。それは明確な問題解決やプロテストではなく、語り難い感情や曖昧で安定しない自分のあり様をどうにか引き受けようとするアートを通じた自分と世界への関わり方なのだと思う。それは「対話を複雑にする」[アーウィン 2019: 27]探求へと私自身を踏み出させるもので、近年のArts-Based Research(ABR)による研究や、アイデンティティの探求と省察のA/r/tographyの取り組みへと繋がってきている。

2-3.アート、社会、特別支援教育(細野)

私(細野)は、高等学校から肢体不自由特別支援学校への転勤をきっかけに、子どもの発達や学習の過程やその機序に基づく適切な支援の必要性を感じ、大学院に入学して心理学や学習科学を学んだ。その後、病弱特別支援学校に転勤し、多様な病気や障害と複雑な家庭的・社会的背景を抱えた子どもたちと出会い、小児科病院や社会的養護施設の指導員、心理士、看護師、精神科医等、多様な専門職の方々と協働していた。そのような日々のなかで東日本大震災に遭遇した。勤務校は内陸にある学校であったため、直接津波の被害にあった沿岸部に比べると被害は軽微なものであったが、しばらくすると隣接する社会的養護施設に、震災で保護者を失ったり、震災の被害を受けて複雑性トラウマになった発達障害の子どもたちが入所しはじめ、これまでの特別支援教育では直面したことのない事態が発生した。地元の大学の研究者とも協働し、子どもたちや保護者の支援にあたったが、これまでの様々な対人援助の知見では効果的な支援法を見出すのが難しい状況にあった。

大震災後の被災地には、幾人ものアーティストたちが訪れるようになった。ほとんどのアーティストは被災地との関わりは一過性であったが、ごく一部のアーティストたちは、当初の災害ボランティアという形から長期の関わりに移行し、なかには被災地に移住して長期間記録や表現に取り組む例も出てきた。彼らの仕事をいくつかフォローしていくうちに直感したのは、基本的に一对一の支援であることからその効果に限界のある精神医学や臨床心理学的な支援では行うことができない、長期間にわたる地域のコミュニティへの関わりでのセラピー的な作用である。

3.11以後の日本のアーティストたちの社会や地域のコミュニティへの関心は、ヨーゼフ・ボイスの社会彫刻の概念等を直接の先行事例として、1990年代から欧米を中心に盛んになり、世界中に広まったソーシャル・プラクティスの動向とも呼応するものである。ここでは、モダニズムの時代には忘れられていたアートの、社会のなかで機能する有用性の概念が拡張して復活している。現在、この社会関与の芸術についての調査とその教育場面での実践が中心的な研究テーマである。

2-4. マリンバと向き合う(古徳)

私(古徳)は、幼いころより祖父からヒロシマの救護体験を聞き、原爆の恐怖感と平和の想いを心の片隅に抱えて育った。マリンバ(木製鍵盤打楽器)奏者になる夢を信じ、マリンバを購入してくれた祖父の存在はとても大きかった。音楽大学でマリンバを学んだ後、ボストン留学中にイラク戦争が勃発し、この瞬間に戦争が起こっているというリアリティーを痛感した。恐怖感と平和への想いは心を支配するまで大きな存在となっていった。

ストックホルムの本屋で井上恭介の『ヒロシマ:壁に残された伝言』[井上 2003]を見つけ、やけどや原爆症に苦しむ人々、放射能、爆発力の強さ、被害の大きさよりも目を引く「伝言」の数々を知った。50年以上経った後に「伝言」の存在を確認し初めて目にした被爆者は「探しに来てくれた人が居て嬉しかった」と涙した。そこには会いたいという想いで突き動かされた人々の行動の軌跡が詰まっており、人々の想いと人間の愛の形が見えてくる。恐怖感に支配されたヒロシマの想いは被爆者たちの心情を想像することで愛の喪失を感じさせ共感を覚えた。伝える手段には人々の心を変化させる力があることを知り、ヒロシマを想像しながらマリンバソロと打楽器2人の曲を作曲し、恐怖と平和の想いをマリンバ演奏に託した。

2009年よりメキシコのチアパス州立芸術科学大学でクラシックマリンバを教え始め、マリンバが人々の生活の中に密着している文化を体験した。お祝い事や会合、葬式と、「ゆりかごから墓場まで」マリンバ音楽と共に生活をする様は、クラシックコンサートで活躍する日本の形態とは大きく異なる。クラシックマリンバを修学し、文化に根付くチアパスのマリンバ音楽と合致して見えてきたのは、実践を通して出来上がるマリンバ作品であった。チアパス州を代表する曲にクラシックマリンバの技巧を取り入れたマリンバコンチェルトを仕上げ、2017年の東京交響楽団と新日本フィルハーモニー交響楽団との共演は、マリンバの発展の可能性を感じる出来事となった。現在、世界に点在するマリンバの実態調査から見えてくるマリンバの発展と可能性を探り、音楽性を追求したマリンバのデザイン研究に取り組んでいる。

3. コロナ禍とオンライン授業の状況で各自の模索が始まる

こうした語りから各自の背景とアートの様々な出会いや出来事の折り重なりが現在に至る姿が見えてくる。これらを踏まえれば、ここで問う表現/研究/実践と社会との接点もこの文脈を無視できない。研究の公開や共有の議論、ネット社会とコロナ禍におけるオンライン化の急激な変化を考えると、繋がり過ぎる時代の中で物事の生成変化に過剰に動くのではなく、生成を妨げないように「動き過ぎてはいけない」[千葉2013]というドゥルーズの現代的展開に見る過剰性への距離感も重要である。社会化や接点化を急がずに、以下のように変化や偶然の展開からの生成的な模索を進めた。

3-1. 学生との活動をオンラインで発信する(笠原)

4月以降、オンライン授業を行う中で二つのことを感じた。一つは、自宅での活動を通して思った以上に学生が自分の感じていることを深く省察し、動画での公開など、オンラインの表現に取り組む姿が見られたことだ。若い世代の取り組みを見て私も彼らのような感覚で活動をオンラインに展開してみてもよいのではと思うようになった。通常の研究では倫理やプライバシー保護をクリアーする必要

があり、Web公開は抑制的である。オンラインのビデオチャットによる共同研究はだいぶ前から行なってきたが、WebやSNSは自分の中で抑制的であったことに気づいた。二つ目は、学生が生み出した表現が彼らの現在をストレートに表しており、この「声」を発信しなければと強く思ったことである。そこで学生にWeb掲載(<https://kasahara-lab.themedia.jp>)を確認し公開を進めたことで、Webでの活動に対する私の意識が少し変化し始めた。

3-2. 動きの意識化とインクルーシブ・デザインのためのエクササイズ(細野)

リアルな環境のなかでの体験は、五感+身体の動きを通した全身での認知になるが、オンラインではモニターを通した視覚と聴覚のみでの限定したコミュニケーションになる。そこで、その制約を拡張するため、身体感覚を捉え返すためのワーク(図1)と、BBCが製作した脳性まひの成人女性の日常生活や就職活動を記録した動画、そして特別支援学校での自身の実践(図2)やインクルーシブ・デザインの作例等を示して、自分自身の身体と障がい、そしてアートを結びつけるエクササイズを考案し実施した。参加者(笠原、古徳)からは特別支援教育での実践への驚きや、通常と異なる感覚への気づきが得られたとの感想を得ることができ、身体の動きや意識化を通して感覚に働きかけるワークショップの可能性に手応えを得た。

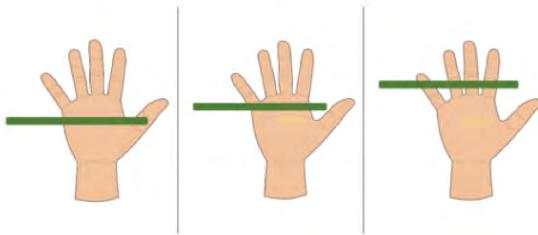


図1 把握の基準を確認するワーク



図2 脳性まひ児のためのパーム・クッション

3-3. 日常から変化を見つける音探し(古徳)

2カ月以上も続いた自粛生活は、同じ風景の連続から居場所の感覚を麻痺させる傾向にあり、孤独や不安を感じる要素にも繋がる。コロナ禍に直面したからこそ感じる意識には、オンラインでヴァーチャルであろうと人と繋がりたいと思う気持ちであり、時間や会話を共有することで生きているという実感を求めていることである。限られた場所での同じ生活の繰り返しは、我が子にとってエネルギーを発散する場がなくてつまらないという、モチベーションやワクワク感など希望を失わせる状況であった。日常から変化を見つけることが必要と感じ、日常にあるものからの音探しを試みた。

まず食卓から音を探す。音を立てないで食事をする習慣のなか、あえて音を立てることに抵抗がある半面、やってみると楽しさが倍増し、今まで気づかなかった音に驚き、また音を出すという、音を出せる喜びに溢れた姿が見られた。どんな音が出るのだろうという好奇心がワクワク感を取り戻させ、なぜそれを鳴らしたと思ったのか興味を辿ることで思い出や体験など自分史の再認識にも繋がった。大きさの違いによる空気振動で出る音や空気圧が異なり、叩いたり、こすったり、投げたり、どうすればよい音になるか、高低音差を探したことでメロディーを考え、メロディーに合わせた一定のリズムを考案した(図3)。叩く撥を箸(木)からフォーク(金属)に変え、より良く響く音を探した。良い音

を曲にしていく行程が自然と成り立ち、アンサンブル(共同作業)が始まった。創造力を高めることで音の違いに繊細に反応でき、探究心と音の体感やそれが合致することが聴覚の刺激に繋がっていた。アートによる「体感の共有」によって人が生きることを支えることが出来るという手ごたえを得た。



図3 どうしたら良く響くのか探し高低音差を付けて叩きやすいように並べる

3-4. 次への取り組み・オンラインワークショップの実施へ

こうした模索から、これまでの活動や知見をベースにコロナ禍の中でも誰かと共有することで新たな感覚や気づきを生み出していけるという手応えを得たことで、そうした取り組みを何かしらの形で誰かと共有する機会を持つことになり、上述の活動の視点に基づいてオンラインでワークショップを企画実施することになった。

4. オンラインワークショップ「みる・きく・ずらす」の実施

実施したのはZOOMを使ったオンラインワークショップ「みる・きく・ずらす—気づきの発見と感覚のアップデート—」である。古徳においては日常の「もの」に潜在する音と音楽性への気づき、細野においては特別支援やソーシャル・プラクティスにおける身体や見ることの枠組みに対する実践を通した気づき、笠原においては「もの」と意味の関係性の変化による自己の視点の変化としてのアート・ワークショップの実践という点で、各自の背景の語りやその後の模索と関連性がある。大学のホームページ等で告知し、本メンバーに加え、参加者7名(一部参加2名)、総勢12名が参加した。2020年8月4日(火)の18:00から21:00に三つのワークショップを各1時間で行なった。参加者には研究の趣旨を説明し承諾を得て行なった

4-1. ワーク1: 動かないものが動くとき何が起こるのか(担当: 笠原)

私たち身の回りには「これはそう簡単には動かないな」と思うものがたくさんある。「これはそう簡単には動かないと思う、モノ(物)や人やこと」を考えてもらい(表1)、それを「動かすとうなるのか」実際に試みた。

表1 これはそう簡単には動かないと思うモノ(物)や人やこと(太字は選択して動かしたモノ)

参加者	モノ	人	コト
A	キャビネット	夏の暑さ	むあ〜とする感じ(湿度)
B	本棚	朝早い自分(想像できない)	マスクなしに人と会話する警戒心
C	地面	電車の時間(自分が合わせないと)	N先生(心が)動かない強いなあ
D	関心のないもの	自覚のない人	真実
E	山・建物	信者(何かを信じきっている人)	秋学期の対面授業の再開
F	山(地に馴染んでる)	木	建物・地面
G	地面・家・建物	空・空気があること	家族や友達があること(存在)
H	建物	大衆・政治家	投票率・人の気質・学校教育
I	名前	言葉の存在	記憶
J	建物(位置変わらず)	人の価値観	政治とか制度、時間が進むこと

【Aさん】は夏の「むあ〜」とする感じを動かそうと外で空気攪拌ダンスを踊った。【Bさん】は「マスクなしに人と会話する警戒心」を選び、根底には気兼ねなく話したい気持ちがあると考え、友達に電話をかけたが繋がらず、文字メッセージを送った。【Cさん】は「電車の時間」を選び、電車時間を調べるアプリで実際にはない時間を加工して作った。【Dさん】は「関心のないもの」を選び、海外で買って使っていないバルサミコ酢を動かすためにメルカリに出品の準備をした。【Eさん】は「山」を選び、都心に山ができたらどうなるか想像し、街の写真をビル形に切り、山を描いた台紙にコラージュした。【Fさん】は「建物」を選び、「家が動く」とは建てた人の気持ちに関わるとし、両親に「家を動かしてよいか」と尋ねてみた。【Gさん】は「空気」を選んだ。現在は空気が吸えるが、今後貧富の差が大きくなるとお金で酸素を買う時代になり、酸素がなくなると人類は滅び、他の生き物の時代になり、地球も巡り巡るとし、その変化を絵に描いた。【Hさん】は「投票率」を選び、ネット投票、選挙掲示板を投票板にする、討論会を見て投票するなどできれば投票率は上がるのではと提案した。【Iさん】は「記憶」を選んだ。記憶を動かすとは記憶の再構築ではない。情報の真偽判断が難しい現在、今後は真実が大事な社会になる。我が子が写る集合写真を使って我が子の記憶を変えてみることを試みたが、我が子がお腹にいたときの感覚や匂いはだけは自分で動かせないことに気づかされた。【Jさん】は「建物」を選んだ。家の外の大きな石を動かすとパリッと割れて家の風景が変わったという。

それ自体が動く場合もあれば、実際に動かせなくても動かそうと思案することで状況や見え方や関係性が変わることに参加者は気づいた。コロナ禍で籠ることが多いが、こうした変化と気づきの創出と共有ができることが見えてきた。

4-2. ワーク2:音探し、音変わり、音楽し(担当:古徳)

私たちは沢山の音に囲まれて生活している。普段は気にしていなかった日常の音に耳を傾け、音の変化を探し、表現を試みる中で何が起るのかを体感し共有するワークショップである。ここでは以下の工程で音の気づきにフォーカスした。

- 1) 身近にあるもので音探し→どうしてそれを選び興味をもったのか?自分への問い
- 2) 音を出す→こする、叩く、ひっかく、引っ張る、空洞の容量で音程差が生まれ、空気振動で音が出る仕組み
- 3) 複数の物体を組み合わせ、違う音を追求する→同じものでも物(撥など)を使って違う音を探す

- 4) 良い音を探す→良い音とは?響きがある、きれいだと感じる音の認識を共有する
- 5) 音の分析→特徴を認識
 - メロディー: 1つ以上の違う音が出せ高音がでるもの
 - ハーモニー: メロディーを支える音で和音がでるもの
 - リズム: 拍がカウントしやすい音、低音がでるもの
- 6) 自分のパートを練習する→一定のリズム、美しいメロディー音、支える音の音量調節、音の工夫
- 7) アンサンブルで一緒に演奏→リズムからハーモニー、メロディーへ音を重ねて一緒に演奏した音を認識し、音の変化、違いを感じ取る
- 8) 録音→客観的に全体でどのような音が出てきたのか認知する
- 9) 身近な音のアンサンブルの共同演奏で、音の変化、音楽への変化を体感する

参加者からは「楽しかった」「アンサンブルの音は自然の中で何かか呻いているように感じた」との感想があった。意識して「聴く」行為や、どんな音になるのだろうかという想像力、アンサンブルで一緒に演奏することで音が重なり合い変容する様、活動工程から音の変化に敏感になり、聴覚が刺激されていったようだ。「音の気付き」を重視するコンセプトが上手く伝わったことでこうした変化が生まれたと考える。

一方で、オンラインで音のずれが生じる問題があった。リアルに聞いている音がノイズとして認識され自動的にカットされるなど、音をテーマとするオンライン活動の難しさを感じた。オンラインで音の認知を活かせる方法と工夫が必要である。

4-3. ワーク3: あなたの暮らす世界を変えよう(担当:細野)

私たちが普段どのように身のまわりの世界を見ているのかを意識化するために、簡単なワークを体験して絵を描く。それによって今まで感じなかった世界が現れる。材料はBのつく鉛筆、A4上質紙、靴下を用いた。

- 1) リラックス…深呼吸、イスに座っている自分の身体を意識する
- 2) あなたはいくつ絵を見ているの?…眼球を指で押して、見えている映像をずらす
- 3) 利き目はどっち?…A4の紙でメガホンを作り、PCのカメラを覗く(図4)
- 4) 利き手はどっち?…片方の手に靴下をはめもう一方の手で顔や身体を触ってみる
- 5) 見えない絵を描く…人差し指を立てて腕を広げ見える範囲(両眼、右、左)を確認し、視野の外で絵を描く 利き目側、反対側
- 6) 未来に向かう…マッハの絵と手話の時間表現(未来・過去・現在)から、見ている世界は未来であると知る

これら6つのワークの感想として参加者から「手探りで描くのは難しい、見て描きたい」「画面のなかの出来事に現実感がない」「バランスを崩すこと(を仕掛けている)」等の感想が得られた。

また、笠原と古徳も含め三つのワーク全体では「自分自身が変化することが大事、まず起点として自分が変わる」との感想が述べられた。外界の世界を変えるための始点として最初に行うべきは、外からの

情報によって形成されている私たちの内部表現を変化させることであるというこのエクササイズの意図がうまく伝わった結果と考えられる。同時にディスプレイの向こう側にいる参加者に一層のリアリティをもってワークを体験してもらうには、より臨場感を上げる工夫が必要であることもわかった。



図4 ワーク3 利き目はどっち?

4-4. オンラインワークショップを終えて

ワークショップを通してオンラインでの実践においても認識の変化が生み出せることや、表現を通して外部の環境や社会との間で自身の変化を引き起こす起点となる体験が生まれることが見えてきた。一方、音の技術的問題や、デバイスが音や体験の質に影響すること、人間が美的判断で音を選ぶことや音楽として読み取り表現することの主体性をどう考えるかという課題も浮上した。ディスプレイの向こう側の参加者に一層のリアリティをもって体験してもらう工夫も必要で、場や状況、コンテキストを共有しない中で伝える難しさがあつた。オンラインと対面それぞれの特性を考慮しながら選択し組み合わせていく必要がある。それによって今までと異なる感覚や体験、気づきの契機を生み出すこともできるだろう。

5. コロナ禍の中でのオンラインでの取り組みから見えてきた 芸術関連活動への視点

年間のオンライン授業は現在の社会状況とのリアルな接点になっていた。遠隔で様々な地域や大学の人と活動できることに可能性がある一方、一足飛びに社会的なものへ物事を拡張することやコンテキストと切り離れたコミュニケーションに難しさも感じた。私たちは自身が形づくってきた認知の基盤である身体や獲得してきた認識や概念の特性でもって世界と向き合っているが、対面的コミュニケーションとは違って様々なニュアンスのズレを身体や情動の表出によって補うには難しさがあつた。目的にもよるが、芸術表現に基づく研究や実践では、三人称的視点だけでなく五感などの身体的な関わり合いや場の臨場感など、二人称的応答や相互(間)主観性・身体性、共同での意味生成、体験やコミュニケーションの質的なクオリアが重要になる。オンラインでは言語情報がメインになりがちで、五感や内部感覚も含めて認知し共有する相互的交流の工夫が必要である。音楽を雑音と捉える機能や美的認識の主体の問題など、オンライン、対面、併用の選択肢の中で何ができるのかを吟味する必要がある。

6. 今後のアートの表現/研究/実践と社会の接点の模索

今回、博士課程の研究の公開と共有を試みたが、従来とは異なる対象に研究の成果だけでなく過程をパフォーマンスに共有していくことは、アートやケアなど臨床的実践領域の研究にとって今後新たな可能性を持つと考える。その際、私たちが自ら表現と研究と実践も行なう立ち位置で記述・発信していくa/rtographyのアプローチは、先が見えないあらゆる可能性が潜在する中で有効な実践と研究の一体的方法と言える。新しい日常が今後どのように常態化していくのか。技術開発が進み、「リアル」や「真実」が多層化・不安定化していく中、アートができること、見落としてはいけないことが何なのか、新たな社会との接点を考え生み出していく表現/研究/実践の模索が必要である。

謝辞

ご協力いただいたワークショップの参加者の皆さまに御礼申し上げます。

参考文献

千葉雅也, 2013, 『動き過ぎてはいけない: ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』, 河出書房新社.

Ingold, Tim. 2007, *Lines: A Brief History*, Routledge Classics. (=ティム・インゴルド著, 工藤晋訳, 2014, 『ラインズ: 線の文化史』, 左右社)

井上恭介, 2003, 『ヒロシマ: 壁に残された伝言』, 集英社新書.

Irwin, Rita L. 2013, "Becoming a/r/tography", *Studies in Art Education*, 54 (4), pp.198-215. (=アーウィン・L・リタ, 2013, 「アートグラフィーへの生成」, 笠原広一, リタ・L・アーウィン編著, 2019, 『アートグラフィー: 芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法』, 学術研究出版, p.27.)

Nancy, Jean-Luc., 2000, *Of being singular plural*, Stanford University Press. (ジャン＝リュック・ナンシー著, 加藤恵介訳, 2005, 『複数にして単数の存在』, 松籟社.)

笠原広一, リタ・L・アーウィン, 2019, 『アートグラフィー: 芸術家/研究者/教育者として生きる探求の技法』, 学術研究出版.

笠原広一, 2017, 『子どものワークショップと体験理解: 感性的な視点からの実践研究のアプローチ』, 九州大学出版会.